道三の時代以来，一字薬名は方薬の組立方法を伝授し，学習する際に活用されてきており，それは江戸時代後期においても例は見られる．そして何より，医者の日常の診療記録のメモなど，実用に便利なものであった．このようにして，一字薬名はその使用場面を増やしながら多様化し，息長く使われた．

② 臨床医の変化と出版物への使用縮小化

もともと一字薬名を多く使っていたのは臨床医であり，現在我々が目にすることができるような書物よりも，むしろ個人的に使用されてきたと想像できる．そして，使用者や使用範囲が広がることは同時に複雑化したことを意味する．たとえ個々の医者の使用パターンには一貫性があったとしても，流派などを跨いだ全体としては，同じ字が複数の薬品に使われ得るような紛らわしい状況も増えてきたであろう．

時代が下ると，医者の数も増えて医学は細分化し，多様な読者を想定した出版物に使われる比率は少なくなってきた．これは江戸時代前期までの曲直瀬流やその弟子の系統が多く，その影響が出版物にも色濃かった頃とは大きく異なる．さらに，薬味の加減運用にそれほどこだわらずに，既成処方をそのまま使う医者が，江戸後期以降は相対的に増えたことも，出版物に一字薬名の使用頻度が減ったことに関係しているかもしれない．

（令和3年10月例会）

朝鮮の医書『東医宝鑑』について

吉村　美香

はじめに

朝鮮の医書『東醫宝鑑』は1613年に編集され23編25巻で構成されている．許俊（ホ・ジュン）という漢方医が編集．2009年にユネスコ「世界の記憶」に選定された．2019年からユネスコ登録に尽力した（韓国）国立韓医学研究院が主導となり，巡回展示会，各所の博物館での特別展，シンポジウム，叢書の刊行，ハンドブックの刊行といった『東醫宝鑑』ユネスコ記憶遺産登録10周年イベントが行われた．筆者も『東医宝鑑叢書』『韓医学ハンドブック東医宝鑑』の刊行に携わった．

今回はその刊行物から，主にユネスコ登録までの流れ，『東医宝鑑』の刊行の背景を見ていく．

『東医宝鑑』と韓国の医学文化

『東医宝鑑』や，作者の許俊（ホ・ジュン）は，韓国では，たびたび，ドラマ，映画，小説のテーマになってきた．ドラマは1970年代から2010年代まで4回，映画は1回，小説はシリーズで1回，テーマにしたものが制作された．その全ての大衆メディアコンテンツは大ヒットとなった．

『東醫宝鑑』を扱っておけば，必ず大ヒットするし，主演した俳優の人気も上がるという「不敗神話」も出来たそうだ．その影響で，漢方医院や漢方医学の需要が増し，漢方医学科の入試難易度もあがるなど，ドラマが社会的にも影響を及ぼした．

様々なエンターテイメントとして，韓国では人気のあった，朝鮮の医書『東医宝鑑』であるが，2009年，その独創性，記録情報の貴重さや重要性，関連人物の業績および文化的影響力など認められ，また日本・中国にも伝播し東アジアの医学の発展に大きく寄与していることが評価され，ユネスコ世界記録遺産（Memory of the World）に選定された．

「大衆メディアが繰り返しヒットしたことで，東醫宝鑑はユネスコ登録されたという可能性はあるのか？」ユネスコ登録に尽力された，韓医学研究院の安相佑（アン・サンウ）博士に伺ってみた．

「小説やドラマといった大衆メディアを通じて，一般の人たちに親しみや認知度が上がっただけ

でなく，世界遺産の現代的価値を証明するということにおいても，遺産が持っている伝統知識が現実でもどれだけ有効利用されているかということが明らかになった（反映された）といえる」
（原文：소설이나 드라마 등 대중매체를 통해 일반인에게 친숙한 것은 인지도에 있어서 중요할 뿐만 아니라　세계유산의 현재적 가치를 입증하는데 있어　유산에 담겨진　전통지식이 현실에서 얼마나 유용하게 쓰이고 있느냐를　반영해 주는 것입니다　2021年10月3日メールより）

ということであった．やはり大衆メディアでの人気で国民への認知度が上がり，またそういったコンテンツ内で，『東醫宝鑑』など漢方医学の知識が，現代でも生きて利用されていることがリアルに実感でき，ユネスコ世界の記憶遺産登録への道につながったとみられる．

『東医宝鑑』刊行の背景・特徴

12–13世紀に，東アジア医学では新儒学（Neo-confucianism）が起こり，その思想に基づき，医療の新体制が生みだされていた．また同時に各国の医療情報を収集していた．また，印刷文化の発達に伴い，収集された情報が本として刊行されていた．代表的なものとしては，1406年に明朝で刊行された医学書『普斉方』には　6万種余の漢方薬の処方が収録されている．また，1477年に朝鮮王朝が刊行した『医方類聚』には，食事との相互作用の治験を含め約10万種にのぼる処方が掲載されている．

このように膨大な医療情報は，データベースとしての情報の蓄積という意味では非常に有意義である．しかし，実際の医療現場では活用には問題もあった．そこで，より簡潔で効果的であり，医療現場で即座に活用できる簡潔な医療情報が必要となった．16世紀以降は，そのような実際的な治療用用途に即した医学書が登場するようになった．

中国では，1515年『医学正伝』と，1575年『医学入門』が代表的である．また，日本では曲直瀬道山（1507–1597）による『啓廸集』が刊行された．そして，朝鮮では1613年に『東医宝鑑』が刊行されたが，このような医学書の中でも画期的であったといえる．漢方薬，鍼灸など，東アジアで伝統的に行われてきた治療技術を蓄積し，その中でも特に医療現場で有用なものを厳選しているため，現在の臨床現場でも役に立つ治療法が沢山残されている．単純に症状によって治療法を羅列するのではなく，疾病を人間を中心に起きる現象と捉えている．許俊（ホ・ジュン）の疾病に対する観念が反映され，許俊の医学観は，当時でも先駆的であったが，現在の医療にも生きており，刊行されてから現在まで有用な医書であるといえよう．

（令和3年11月例会）

書　評

閔凡祥 編纂
『中文医史研究学術成果索引（20世紀初至2019年）』

本書は，中国で出版された20世紀初頭から2019年にいたる百年余りの医学史研究，また文学，人類学，経済学，民俗学，政治学といった関連諸分野における研究を集めた索引集である．編者である閔凡祥氏は，現在中国の医学史研究をリードする研究者のひとりであり，専門とする近現代ヨーロッパのみならず，中国近現代・明清期の医療史研究にも積極的に取りくんできた．また，近年では欧米における医学史研究の方法論や研究成果を中国で紹介し，中国の医学史研究の成